

「We are all brothers!」

早稲田文化館日本語科 李 咨余（中国）

1月、真冬の日本に到着した日、スーツケースを引きずり、寒風吹きすさぶ東京の夜道をスマホのグーグルマップを見ながら歩いた。東京は私が生きていける所だろうか。事前に契約したアパートを探しながら思った。その時はわずか4カ月で日本人のおじさんとお酒を飲む経験をすると想像しなかった。

5月のある日、普段よく利用する飲食店で注文していると、2人のおじさんが入ってきて私の隣に座った。あいさつを交わし世間話をした。正直言ってその時の私の日本語力は高くなかった。おじさんたちは酔っていて言葉がよく聞き取れなかったが、表情や口調から察してなんとか会話は続いた。良い気分になったのか、おじさんの1人が「この子にもう一杯おごる!」と言った。少しの恥ずかしさとうれしさを感じつつ、私は受け入れた。

おじさんは若い頃のオーストラリアでの仕事や旅行の経験などについて話してくれた。そして、私の肩を叩きながら、英語で「We are all brothers!（私たちはみんな兄弟だ!）」と言った。「We are all brothers!」おじさんの誠実そうな笑顔に私も返した。この短い言葉は日本に来て4カ月の私に心の安寧を与えてくれた。

「短い言葉」。お正月、家族が互いに祝辞を述べていた時のことを思い出した。父は「将来のために高

い目標を持ち、大学院に進学して懸命に勉強しなさい」と私に伝えたはずだ。しかし「日本では健康で安全に過ごすように」という短い言葉だけ。わかってはいる。厳しくはないが私の学業や将来に期待している父だ。多くの言葉を並べなくても私には伝わる。異国に旅立つ私に厳しくも優しく背中を押してくれる言葉だった。

予想外に短い言葉をかけられると、言葉の中の意味の重さを感じる。特に心が通じ合った人の言葉はかけがえないものだ。おじさんの「We are all brothers!」と父の言葉は今後の生き方を教えてくれる言葉だった。私は今、これらの言葉や人とのつながりに支えられながら留学生生活を送っている。

おじさんたちと別れ、アパートに帰った。ベッドに横になるとさまざまな疑問が浮かんだ。

今はソーシャルメディアを使えば、目の前に相手がいなくても瞬時にメッセージのやりとりができる。しかし、それが人や民族、国とのつながりを密接にしただろうか。インターネットの高速性と便宜性は、家から一步も出ずに社会と隔絶する人を増やした。自分自身をサイバーパンクの仮想的な仮想の姿に置き換え、他人が幻想する自分、自分が幻想する他人との仮想的社交関係に没頭する人もいる。批判や中傷、偽のニュース。情報伝達速度は以前と比べものにならないほど速くなったが、理性的な議論は無視され、事実は歪曲される。主観的で扇動的な情報が以前より速く広まる。無責任な批判、大げさで中身の無い言葉は、ネットフォーラムの至る所に見られるが私の頭にも心にも残らない。なのに、影響力は大きく、特定の人たちを傷つける。

ソーシャルメディアがインフラの一部となった現代では、面識もない人を簡単に愛したり、憎んだりする人がいる。宗教や文化が異なるだけでステレオタイプな考えを抱き、特定の人たちにレッテルを貼る人もいる。私を困惑させるのは、よく知らない異国や異民族の人に対する強い憎悪を表す言葉だ。私たちは人とのつながりに助けられて生きているのに、敵に囲まれているかのような言葉。コロ

ナウイルス感染拡大、終わりが見えない紛争、難民問題はその風潮を広げている。このような世界で私たちは安心して生きられる場所、自分を守れる場所はあるのか。

「We are all brothers!」のおじさんも私の父も、私を知っている。私も彼らを知っている。信頼がある。その関係があるからこそ、言葉は私の心に響いた。

安心して生きられる世界をつくるには、時間を使って自分から相手を知る努力をしなければならぬと思う。相手にも本当の自分を知ってもらわなければならぬ。そして、本当の気持ちや意見を伝え合う。ソーシャルメディアは相手を知るための道具にすぎない。

争いは誤解や不信から生まれる。「最初から敵」などいない。「敵」は人や民族、国ではなく、不合理な慣習、体制の中にある欠陥だ。敵をつくって争うことは非効率でストレスになる。時間をつくって互いを知り、愛し合うほうがいい。信じられる言葉をくれる人と暮らせるなら、そこが自分の安住の場所だ。

皆、きつと頭ではわかっている。しかし、正しい道を歩もうとしても近道を求めてしまう。求めれば求めるほど遠回りになるのだ。

